

# あいち木造 ミーティング 2017

2017.9.23(Sat)  
13:30-17:00

会場：梶山女学園大学メディア棟 G01 室

参加費：会員・学生無料、一般1000円

開場：13:00 開始：13:30

全体司会：石山央樹（中部大学）

主旨説明：13:35～13:45 太幡英亮（名古屋大学）

「木造美意識マッピング」

基調講演：13:45～14:25

坂口大史氏（日本福祉大学）

「日本とフィンランドからみる木と建築の未来」

話題提供：14:25～15:45（20分×4名）

「私は木をこう使う」

寝殿造的）長谷川 寛氏（竹中工務店）

倉 的）東海林 修氏（東海林建築設計事務所）

民家 的）降幡 廣信氏（降幡建築設計事務所）

数寄屋的）佐々木 勝敏氏（佐々木勝敏建築設計事務所）

ディスカッション：16:00～17:00

まとめ：清水秀丸（梶山女学園大学）

参加申込メール：[kiainokai@gmail.com](mailto:kiainokai@gmail.com)

申込〆切：9月16日 木愛の会事務局長 石田富男 宛  
〒460-0008 名古屋市中区栄5-1-32 久屋ワイエスビル8F  
（株）都市研究所スペースア

主催：木造都市研究会 **木愛の会**

## 私は木をこう使う

木や竹を活用した建築の製作・提案、学生コンペや研究会の開催など、木造都市実現に向けた様々な取組を行ってきた木愛の会では、今年第二回目となる左記のシンポジウムを開催します。

公共建築の木造化、様々な建築・家具などへの国産材・地域材活用は、設計者・施工者・自治体・大学関係者など建築を専門とする人々には、取り組むべき課題として一般化し、やはり言葉のように繰り返されています。しかし、一市民、消費者の視点に立つとそこにリアリティは感じられているでしょうか。さらに、建築業界の人たちの間でも、「木造」に感じ取るイメージは多様化していて、お互いの「木造」に対する共感が得られず、意思疎通が難しい側面もあるのではないのでしょうか。

我々日本人は、長い木造建築の歴史のなかで、極めて多様な建築様式を歴史とともに作り上げ、極めて幅広い美意識の変遷を経由して、現在に至った様に思います。そうした背景がありながら、現在の専門家間での木造ブームは「木造」という言葉のもとに一括され、ゆえにその多様な美意識の齟齬については意識化されず、放置されたままになっています。今回注目したいのは、「木造」であることの重要性ではなく、それによりどのような空間を提供しているか、その「木造」が立脚する価値観、美意識の如何です。

実は、昨年の木造ミーティングでのディスカッションの最後に投げかけられた問いは「地元材の使用という問題と市民の距離感が遠すぎる」というものでした。この問いを踏まえ、今年は木造に対して市民の持つイメージと専門家の持つイメージの違い、さらには個々の専門家の持つイメージ、美意識の違いについて考えてみたいと思います。

日本とフィンランド・専門家と非専門家の木に対する選好性の違いを解き明かした坂口大史氏の基調講演と、異なるタイプの第一線の建築家らによる「私は木をこう使う」の講演をもとに、議論を深めたいと思います。

基調講演：坂口大史（日本福祉大学）  
「日本とフィンランドからみる木と建築の未来」

日本とフィンランドは、世界有数の森林大国であり、長い木造建築の歴史を有しているという共通点をもつ一方で、両国における「木」を取り巻く状況は大きく異なっています。本講演では、日本とフィンランドの「木」に対する意識の比較考察や事例紹介を基に、歴史、文化、社会、経済などの横断的な視点も含めて、日本における木と建築の未来について考えます。

主旨説明：太幅英亮（名古屋大学）  
「木造美意識マッピング」

「木造」の美意識の多様性を捉えるために、試論として、木材の構成を意匠的に意識するか・意識しないか、木材の寸法などの扱いを揃えるか・揃えないかという2軸から、数寄屋、寝殿、民家、倉という伝統木造の4様式を対比してみました。今回のミーティングでの多様な設計者の持つ木造のイメージをとらえる手がかりにしたいと思います。



佐々木勝敏（佐々木勝敏建築設計事務所）

建物に求められるものが年々多様化しており建築的要素も常に加え続けています。多様な要求に対して個別に回答を用意する建築を作るとさらに年月が経過した際の要望に対応できない建築となってしまうそうです。そこで要素を減らすことで要望以上の可能性に開かれた建築を考えたいと思います。構造、家具、仕上げといった様々な形や用途に対応可能な木の特質をさらに再考し、木の可能性と共に建築のあり方についてご紹介いたします。

長谷川寛（竹中工務店）

日本人だけでなく我々はなぜか樹木としても建材としても木が大好きです。命を持ち材種や加工方法で肌や目にいろいろな表情を見せることに心を奪われます。私は空間をつくるにあたり、どういう材料とスケール感で作るかを大事にしています。それは材料の特徴を現すことだと思っています。他の材料と比べ特筆すべきは、香りがあり経年で変化をしていくことです。その場所を訪れた時にプレゼントのように気づきを得られ、空間に時間を埋め込むことができるように使いたいと考えています。



数寄屋

材寸・材種や窓等の構成を敢えて揃えず、自然を感受した繊細かつ粗野な意匠が細部まで強く意識されている。

揃えない

入手しやすい地域材と素朴な構法を背景に、揃わない材の多様性が生かされる一方、意匠の意識は薄い。



民家

意識する



寝殿造

高度な構法とともに材寸や柱間などは美しく揃えられ、華麗な組物や建具など豪華な意匠として現れる。

揃える

保管という機能を最優先し、必然的に材寸や柱間などが揃うとともに、意匠的な意匠の意識は消される。



倉

意識しない

伝統的な建築を見るときには、種別や様式の区別の基となる用途や意匠、装飾などに目が行きがちですが、使われる木材の構成と扱いに着目した二つの軸によって建物を捉えるこの試みは、木造建築の良さ、魅力を新たな側面から示す意義のあるものと思います。

そして、設計者による意図的な美と、鑑賞者によって発見される無意識の美を分かりやすく示し、多様な美のあることが伝わるものになっていると思います。

このマッピングは伝統建築と現代建築を同時に見比べることも可能にし、目の前にある建物の美しさを伝え、話し合う一つの指標になるのではないのでしょうか。

監修：米澤貴紀（名城大学・建築史）

画像：Wikipedia、奈良国立博物館

降幡廣信（降幡建築設計事務所）

私は木を生き物として使っています。「木は二度生きる」という前提で、一度目の木の生涯は大地に根を張って年輪を重ねて生きる「樹木」です。私達の付き合う木材は、伐採され「用材」となった、二度目の生涯として生きる木材との付き合いです。

その「木材」は——毎年同じように年をとって表情が明らかに変化するという事です。新材には初々しい幼児の表情があり、年々変化しながら100年経過した木材には老人の表情のたくましさがあります。

その変化を美しく想像しながら私は木を使います。

東海林修（東海林建築設計事務所）

「板倉」は伊勢神宮や正倉院にも見られる様に1000年以上前から存在する構法です。耐震性能や防火性能を現代の法律や必要数値に見合うようにアレンジし、国の承認をとったものが「落とし板壁構法（板倉構法）」です。2020年の省エネ法改正に向け、各地で現地調査を重ね、新しい仕様をつくることができ間もなく発表をします。

杉材の柔らかな特性を生かし、日本古来の伝統から学び、現代の建築に生かすように考えたのが「板倉構法」です。